

1 研究の趣旨

本校の過去2年を概観したとき、全校生徒に占める不登校生徒、新規不登校生徒の割合は高く、さらに増加傾向にあった。そこで、不登校生徒の教室復帰を目指す一つの足がかりとして考えたのが、別室登校による支援である。不登校生徒の現況改善に向けて以下の研究仮説を設定し、校務分掌にサポートルーム（以下、SR）担当教員を位置付け、本格的な支援を行っている。

学校生活において、「共に認め合う学級づくり」、「分かる・できる喜びを感じさせる授業づくり」、「SRの機能の充実」という三つの手立てを講じれば、新規不登校生徒の抑制と、不登校生徒の減少・改善につながるだろう。

2 研究の概要

本研究では、上記の手立てのうち特に、「SRの機能」に重点を置くこととした。そこで、SRの機能の充実を図るために、次の三つを柱として実践した。

(1) 個に応じた室内環境の整備【物的環境の整備】

SRでは、教室に入りづらい生徒でも気軽に学べるような教室環境に留意している。一人でクールダウンしたり、落ち着いて学習したりすることを望む生徒のために、パーテーションで仕切られた個別コーナーを設置する等を行った。また、SR内の人間関係に配慮しながら、ペアで学習したり、反対に距離をとったりするなどの柔軟な対応に心がけている。

(2) ソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）の考えを取り入れた活動の充実【社会性の伸長】

SRでは、単に教室に戻ることを前提とした支援を目指すのではなく、生徒一人一人の人生を長い目でとらえ、いずれは社会の中で自立できるような支援を目指している。そこで、SSTの考えを取り入れた活動を試みている。SR内でも交流ができるように、SSTを行う時間を決めて、「マンカラ」ゲームや都道府県パズルなどの活動を取り入れることにより、学級や学年の枠を超えた交流ができています。

(3) 一日のスケジュールの立案【自己決定力の伸長】

登校後に一日のスケジュールを生徒に立てさせ、下校前に振り返らせる「学習記録」を継続させている。自らの生活を自己決定させ、しっかりと振り返らせることは、生徒一人一人の自主性や主体性を育てる上でとても大切なことだと考えられる。一日のスケジュールを立てる際、生徒一人一人の状況に応じて、教科によって学級での授業に参加したり、SRで教科担当の教員から個別指導を受けたり、特別支援学級での授業に参加したりするなど、学習活動を柔軟に選択できるようにしている。自分の意志で選択させることにより、自己決定できる力を身に付けさせたいと考えている。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- それぞれの生徒のパーソナルスペースは様々であり、本人のその日の状態にも合わせた人との距離感を保てるよう、生徒同士、関わる教員側とで配慮した。教室へは行けないが、SRへは継続した登校ができるといった本人の安心にもつながっていたと考えられる。
- SR内で学級や学年の枠を超えた交流ができた。SSTの考えを取り入れた活動は、生徒一人一人の社会性を身に付ける一助となった。
- 学習意欲が低い生徒もいたが、本人が好きなことを把握し、学習だけではない幅広い選択肢を用意することで、一日の活動につなげることができた。
- 不登校問題を、担任だけが背負うのではなく、学校全体で取り組むという意識が教員の中に生まれた。教員が協力・連携して、不登校問題に対処した。

(2) 今後の課題

- SRに通う生徒一人一人の状況は多様であり、SSTの具体的方法や個別の学習支援など、専門的な知識や技能の研修が求められる。
- 自習課題に自ら取り組むことができない生徒への対応に苦慮した。無理なく取り組むことができる課題を用意することが必要である。対話により、一人一人の気持ちやニーズを引き出しながら、個に応じた対応をとっていくことが必要である。